

4 4 【みみぶくろ】

懐爺にとって一番こわいおぼけは何か、きいてみたことがあります。

まだ逢ったことがないけれども、ぼくは【たいようかめん】。

運命というものにもまだ逢ったことがないので、おそろしい。

懐爺は少しかんがえて、

「わたしは、【かいびょう】ですかね」

といいました。

意外でした。

懐爺は野良猫にも優しく、雨の日や寒い日には、かならず祠に入れてあげているので。

「かいじいが、かいびょうのう」

ぼくが不審、不満そうな声をだすので、

「【かいびょう】は油をなめるからこわい。【かいびょう】は手招きするからこわい。何よりも、【かいびょう】は喋るからこわい。猫が喋るのはこわいものです」

「そうかのう。ねこがしゃべったら、かわいいがのう」

ぼくが納得しないので、懐爺の蘊蓄（うんちく）が、また始まりました。

「昔の本で『耳袋』（みみぶくろ）というものがあります。不思議な話がいっぱい詰まった本ですが、そこにも人間の言葉を喋る猫がでて来ます。それも一言二言ではなくて、けっこう喋る。馬や牛が喋るんなら、夢幻をみたんだっておもいますが、猫が喋ると夢幻ではなく、信憑性（しんぴょうせい）があってこわいのですよ」

「かいじいも、よわむしだのう」

ぼくがそう言うと、懐爺は話をそらせました。

「金ちゃんは、漱石の『吾輩は猫である』を読んだことがありますか」

都合（つごう）が悪くなると、いつもそうなのです。

「そうせきは、わしのともだちじゃ。ねこと、ぼっちゃんは、いいのう」

そうやってやると、懐爺はまた話をそらせました。

「ところでじつは、【みみぶくろ】というおぼけもいるんですよ」

「みみのかたちをした、おぼけかのう」

「残念でした。耳にできるおばけです」

「そらあ、おばけ、でなくて、おでき、じゃろ」

ぼくは嗤（わら）いました。

「失礼ですね。わたしだって、おばけとおできの区別くらいはできますよ」

懐爺はおこって、祠の中に消えてしまいました。

だから【みみぶくろ】の正体は、それ以上きいていません。